

私にとっての図書館、昔と今。そして学生にとっては？

法学部教授 田中正人



学部学生時代に学部図書室あるいは大学附属図書館を熱心に利用した記憶はあまりない。修士論文のテーマを「革命的サンディカリズム」と定めたのはかなり遅く、修士課程2年の夏前のことだったろうか。世紀末から第一次大戦前までのフランス労働組合運動の特異性に惹かれての選択であった。図書検索は分類番号と著者名のみが手がかりというもどかしさ。第一次資料を駆使しての論文作成にはほど遠いものであった。

その後、一橋大学図書館のメンガー文庫にフランス労働総同盟CGT議事録が所蔵されていることを知り、当時同大学社会学部に在籍していた高校の同窓生を頼って複写にいきしんだ。ただ当時の複写は電子リコピーと称する油臭さのする、濃淡のハッキリしない重いものだった。その資料を使つての論文は査読らしきものをパスして活字化。まああの出来であったか。

*

オーバードクターを経て前任校に就職。初めての留学先はパリ第一大学。社会主義運動、サンディカリズム研究の大家を頼つてであった。主として通つたのはソルボンヌ大学図書館と国立図書館BN。ソルボンヌでは既にゼロックスが導入されていた。1枚あたり50サンティーム（当時の為替レートで25円程度）。近くの銀行で50サンティーム貨に両替し、1枚1枚投入するという手間。そして時折～しばしばそのマシンはアンパンヌ（故障）。それよりも驚いたのは学生たちが館内で食べ物を頬ばり、女子学生は男子に視線を送っていた（ように感じられ

た）こと。

BNでは研究者・教員が通うとされていただけあって、落ち着いた雰囲気（故ミッテラン大統領の肝いりで移転した後のフランス国立図書館BNは一般にも開放されているが）。ただしバンカーズ・ランプもどきのグリーン傘から射す薄暗い各自・部分照明の下での読み書きは難行・苦行であった。古代、ガリアの時から森を駆け巡った部族の末裔ゆえに、暗がりの中でも眼の利く人びとばかりではないのに、なぜこんなに暗いとぼやくこと。しかも複写条件の厳しいこと！移民系の係員が複写担当だったのだが、16折（A16版）であれ、A4版であれ、1ページごとの複写（価格は1フランだったか）。しかも、日本のように背中を押さえて見開き両ページをコピーなどということは書物を傷めるということでもつての外であった。既に痛みかけた書物については風呂屋の番台のような司書（コントロールあるいはコントロールズ）を見上げながら、いちいちお伺いを立てる必要あり。彼（彼女）らが昼食時にワインを飲んだ後が狙い目とばかり、こちらでもワインをひっかけての交渉に期待をかけたのであった。コピー許可の出ないものはマイクロ化を依頼することに。帰国後に、マイクロリーダーで読んだり、プリント屋に出したり、製本屋に出したり。

**

2度目の留学の際には、高等師範学校、パストゥール研究所もあるユルム街の国立教育学研究所が受け入れ先となった。第三共和政初期の初等教育イデオロギーと同じ時期の軍制史とがテーマ。研究所の図書は館外持ち出しをしてサン＝ジャック街の格安コピー店でせつせと複写。BNの方はマイク

ロ・フィッシュ化を推進しつつあり、依頼者がその経費を負担しなくてすむ制度に乗りうるケースがあって大助かり。ただし帰国後にプリントする経費は半端なものではなかった。

さてこうして資料を収集して、帰国後。いざ、という時に前任校は移転・拡充の将来計画の渦の中に。難儀な役回りを仰せつかり、学内での会議また会議、設置者や文部省との交渉の連続。生来の怠惰さは大学運営の忙しさを口実にいっそう募るばかりで、研究からは遠ざかる一方。移転の後も、またはや次の将来計画(永続革命か連続革命か?)の渦中に。新しい図書館もほとんど利用できないままだった。

そんな時、縁あって本学に移籍。前任校よりはるかに規模の大きな大学にふさわしい図書館。ところが、本学に来てからも、研究者として図書館を利用した回数はそれほど多くはない。雑誌コーナーで和雑誌記事のチェックをするのがほとんどである。『ル・モンド』や『リベラシオン』といったフランスの新聞はネット上で購読。辞書についても<http://www.lexilogos.com/>にアクセスすればいちおう用は足る。35年ぶりに翻訳を再開した「バブーフの陰謀」関係の文書類は、かなりの程度、<http://catalogue.bnf.fr/>あるいは<http://gallica.bnf.fr/>にアクセスして、PDF化されたものをダウンロード可能。古書についてはネット販売網を構築しているAbeBooksなどで探索・入手可能、決済はカード。以前は海外から郵送(たいていは船便で)されてきたカタログを見て、急いで(しかし時差を考慮して)国際電話を掛けて注文、決済は郵便為替で、などということもはやない。そんなわけで、少なくとも私の場合、図書館を研究のための手段とする必要性は過去に比べて格段に小さくなっている、と言いうるのではないだろうか。

さて学生サイドではどう図書館を利用して

いるのだろうか。名古屋校舎の図書館では、入り口からカウンターに行き着く前にAVその他の広いスペースが配置されていることにいささかビックリ。情報メディアセンターも同じ建物の中に置かれているのは、すでに図書館のコンセプトが筆者の学生時代とは一変しているのか、と感慨しきりであった。それにしても車道の図書館にはAVコーナーがない。メディアセンターは階が違う。スペースの関係であろうが、名古屋校舎との違いが気になるころではある。豊橋校舎の図書館は入り口からして狭かったが。

他方、低価格化・高性能化したPCが普及し、ネット利用が進んだことは、言われるところの活字離れにいっそうの拍車をかけているのだろうか。例えばレポートを作成するのに、資料はどう集めているのだろうか。春学期の入門演習という、きわめて限られた経験からは、5月初旬にせっかくやっていたいただいた図書館ガイダンスにもかかわらず、その後に図書館を利用した学生は皆無に近かった。ネット情報は、政府関係サイトの利用もあったが、Wikipediaを利用したケースが最も多かった。名古屋校舎に出てくる曜日数が限られていて、その日は講義で忙しく、図書館に立ち寄る時間がないからなのかも知れない。それにしても今の学生は、と嘆息をついている場合ではない。あくまでも筆者の限られた情報からの推測ではあるが、情報を入手する媒体としてあまりにも活字が敬遠され、軽視されている事態は、今後の図書館のあり方に大きな問いかけをなしているように思われるのだから。

「マルチメディア時代」「ハイパーメディア時代」をすでに生きつつある学生にとって、古代アッシリア、エジプト・アレクサンドリア以来の図書館library : bibliothèqueの存在理由は、したがってその利用意義はどこに見出しうるのだろうか。今後どのようなコンセプトでの図書館構築および運営が望まれるのだろうか。